

建設省職員宿舎新築に伴う

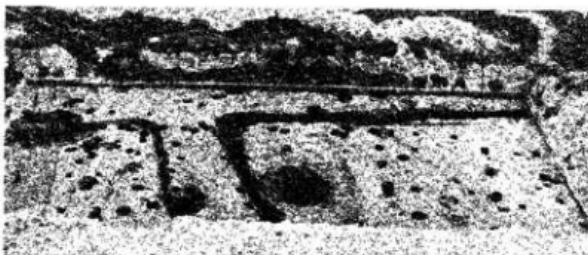
# 天神遺跡発掘調査報告書

1982年3月

出雲市教育委員会

建設省職員宿舎新築に伴う

# 天神遺跡発掘調査報告書



1982年3月

出雲市教育委員会

## 序

出雲市天神町附近で弥生時代から続く遺跡が発見されたのは昭和46年でした。それから10年の歳月が流れましたが、その間都市化が急速に進むなかで、島根県教育委員会の指導のもとに第2回目の発掘調査を昭和50年に実施しました。続いて出雲考古学研究会による発掘調査も行なわれ、弥生時代から奈良時代さらに中世に至る大規模な複合遺跡であることが明らかになり「天神遺跡」の名は広く学界に知られるようになりました。

今回の調査は建設省出雲工事事務所の委託を受けて行なった 200 平方メートル余の発掘であり、造構の性格を断定するまでには至りませんでしたが、天神遺跡の解明に少しでも役立てば幸いに思います。

本書刊行にあたって調査にご指導ご協力を賜わりました関係各位に厚くお礼申しあげます。

昭和57年3月

出雲市教育委員会

教育長 清水 寛

## 例　言

1. 本書は、天神遺跡（島根県遺跡2862号）のうち建設省職員宿舎2号棟新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2. 調査は、建設省中國地方建設局出雲工事事務所の委託を受けて、出雲市教育委員会が昭和56年10月21日から12月17日まで実施した。
3. 調査は、以下の体制で行なった。

調査員 川上　稔（市立出雲図書館主事）

事務局 今岡　清（出雲市教育委員会社会教育課係長）

安井　榮（　　同　　主事）

4. 調査にあたっては、地元各位をはじめ建設省出雲工事事務所の協力があり、島根県教育委員会園山和男、島根教育文化財団平野芳英、柳浦俊一の両氏からはご指導をいただいた。記して謝意を表する。
5. 本書の編集執筆は調査員の手によるが、図面・図版の一部については京都産業大学学生樋野真司君の協力を得た。

## 目　次

### 序

I	地理的環境	1
II	歴史的環境	4
III	遺跡を構成する層序	6
IV	調査に至るまでの経緯	8
V	調査の経過	9
VI	調査の概要	12
VII	遺構と遺物	13
VIII	結語	22

参考資料 天神遺跡発掘調査のあゆみ

## 挿図目次

図1 天神遺跡周辺センター図	1	図10 溝IIIセクション図	15
図2 天神遺跡周辺の土壙図	2	図11 掘立柱建物跡I・II遺構実測図	16
図3 周辺の主要遺跡	4	図12 掘立柱建物跡III遺構実測図	16
図4 遺跡の層序	6	図13 土壙I遺構実測図	17
図5 発掘区位置図	8	図14 土壙I出土遺物実測図	18
図6 遺構配置図	折入	図15 土壙II遺構実測図	19
図7 溝Iセクション図	13	図16 土壙II出土遺物実測図	19
図8 溝I出土遺物実測図	14	図17 P54出土遺物実測図	20
図9 溝II出土遺物実測図	14		

## 図版目次

図版1 天神遺跡の近景	3	図版30 土壙I出土遺物	18
図版2		図版31 土壙II	19
3 発掘調査の進捗状況		図版32 上壙II出土遺物	20
図版19	9~11	図版33 P54遺物出土状況	20
図版20 溝I	13	図版34 P43遺物出土状況	21
図版21 溝Iと溝III	13	図版35 P43出土遺物	21
図版22 溝I出土遺物	14	図版36 覆土中の遺物	21
図版23 溝II	14	図版37 新聞記事(昭和47年)	25
図版24 溝III	14	図版38 報告書(昭和47年)	25
図版25 溝IV・V・VI	15	図版39 新聞記事(昭和50年)	25
図版26 掘立柱建物跡I・II	15	図版40 報告書(昭和52年)	25
図版27 掘立柱建物跡III	17	図版41 新聞記事(昭和53年)	26
図版28 土壙I	17	図版42 報告書(昭和54年)	26
図版29 上壙I遺物出土状況	18		

## I 地理的環境

山陰屈指の海外平野である出雲平野は、斐伊川を挟んだ東西に細長く横たわり、西に大社湾、東に宍道湖、北と南に低い山なみを仰ぐ風光明媚な地域である。

平野の生いたちは1万年以上も時代を遡り、斐伊川などの河川によって生成された基底扇状地疊層の堆積にはじまる。後水期の海面上昇に伴う海成粘土層の堆積を経たのち、沖積陸成層（砂層）の堆積に及んではじめて現在の平野の基盤が形成されている。

しかし、当時の出雲平野の景観は現在のそれとは似ても似つかぬもので、それは奈良時代に編纂された『出雲國風土記』を翻ぐだけで瞭然である。平野の中央部には、「周り35里74歩」（周囲18.84km）の「神門水海」（現在の神西湖の前身）があり、「出雲大川」が西に流れ「神門水海」に注ぎ、「神門郡」には「宇加池」をはじめとする池沼群が南の山麓に点綴するような低湿地が広がっていた。僅かに「出雲大川」の両岸だけが、或るは土地豊かに沃えて土穀・桑・稔り穂枝に、百姓の膏腴の蔭なり。或るは土地豊かに沃えて、草木叢り生ひたり。と記載されるような肥沃地であったことが窺われる。

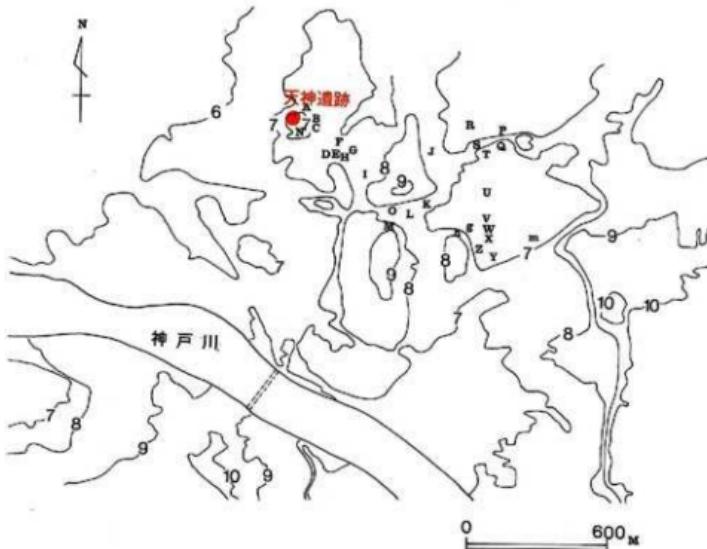


図1 天神遺跡周辺センター図

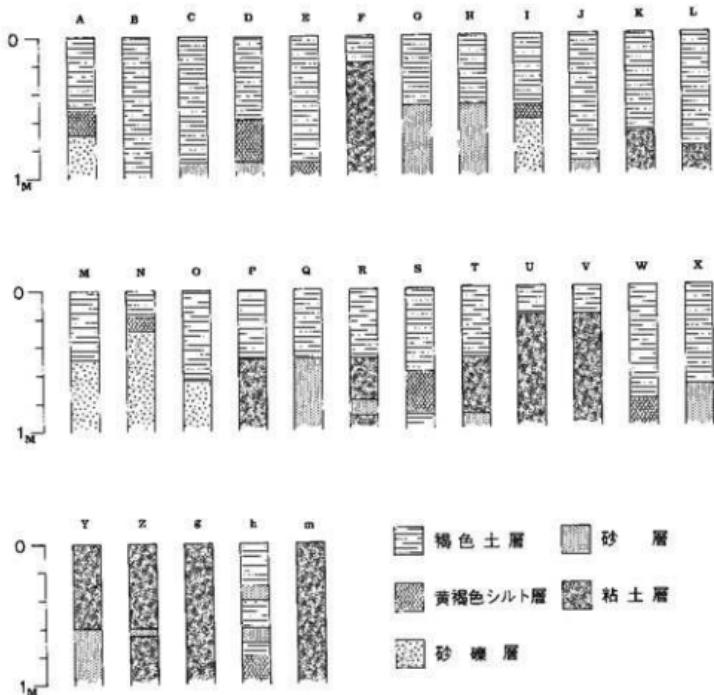


図2 天神遺跡周辺の土壌図

こうした水郷のような景観も、治水・土木事業の発達した江戸時代になると、北山と浜山に挟まれた菱根池が神門郡小山村（現在の出雲市小山町）の三木与兵衛によって干拓され、新田5ヶ村（江田・八島・入南・菱根・浜）を得たほか、高瀬川・十間川を掘って流域に美田をもたらした大槻七兵衛、西園あたりの神門水海の跡地を開拓した下庄村（現在の出雲市下横町）の泰喜兵衛ら先人の多大な努力によって、やっと現在見られるような出雲平野が形成されたものである。

こうした平野の表層はいろいろな労力によって培われているが、出雲平野においては斐伊川と神ノ川の二人河川の冲積作用が多大の影響を及ぼしている。平野の微地形は、大社湾沿いの砂丘地帯、北山山麓の小丘状地群、平野の東と南に広く展開する自然堤防帶に大まかに分類でき、沖積低地の地目の殆んどが水田であるのに対して、集落や畑地として主

地利用されている。

天神遺跡は、沖積低地との比高1~2mの高燥な自然堤防上にある。遺跡周辺のコンターネット（図1）は、出雲市都市計画図（2,500分の1）の1m毎のコンターをひろいあげたもので、平野の微地形がよくわかり、天神遺跡付近では7mコンターがおよその沖積低地と自然堤防の境界線となっている。この自然堤防帶には高西遺跡や神門寺廃寺などが営まれ、沖積低地を距てた上塙治町の自然堤防帶には築山遺跡、三本松遺跡などが立地している。

天神遺跡周辺の29地点を、1mの検土杖によって土壤堆積状況を調査した結果が図2である。それによると、A地点の地目は畑で、耕作土及び褐色土の下は黄褐色シルト層が20cmの厚さで堆積し、その下層は自然堤防の基層である拳大の礫を含む砂礫層となっている。また、同じ自然堤防にあるD地点は地目が水田であるが、本来高燥で畑地に適していた土地を、水利の改善によって水田化したものであることは、層序がA地点と同じであることから明らかである。それは、今回の発掘調査地の層序にも符合する。沖積低地における層序は、Z地点のように粘質土層が卓越しており、水分を多く含んだ低湿な様相が強い。浜山の東側がかって沼田として地形図に登載されていたように、二つの自然堤防に挟まれ、7m等高線が円を描くような排水不良の集水地帯であることがその主因のようである。

最近では、沖積低地の水田下からも、古代遺跡がかなり発見されるようになってきている。出雲平野では山持川川岸遺跡などの例があるが、全国的には明らかな集落址も報告されている。今後、沖積低地にも気を配る必要があろう。



図版I 天神遺跡の近景（南から）

## II 歴史的環境

天神遺跡は弥生時代から近世に及ぶ複合遺跡であるが、出雲平野における遺跡の初現は縄文時代早期末の菱根遺跡にまで遡る。

縄文時代の遺跡は現在の出雲大社の周辺に原山遺跡・大社境内遺跡が次々に営まれているが、出雲市内においても、昭和54年に島根県教育委員会が実施した上塙治地区遺跡確認調査によって、三反田遺跡が発見された。出土土器は少量だが、市内における縄文時代遺

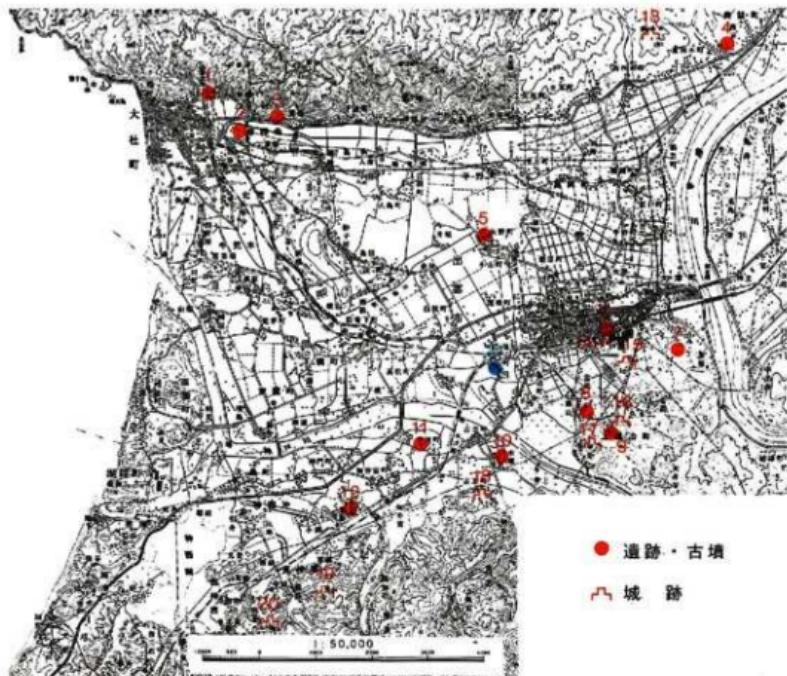


図3 周辺の主要遺跡

1. 大社境内遺跡
2. 原山遺跡
3. 菱根遺跡
4. 大寺古墳
5. 矢野遺跡
6. 大念寺古墳
7. 西谷墳墓群
8. 築山古墳
9. 大井谷横穴群
10. 古志本郡遺跡
11. 多聞院遺跡
12. 榮知寺横穴群
13. 蔷ヶ葉城跡
14. 平家丸城跡
15. 向山城跡
16. 大井谷城跡
17. 半分城跡
18. 浄土寺山城跡
19. 高城跡
20. 神西城跡
21. 天神遺跡

跡の初見として注目される。

縄文時代の遺跡が平野の縁辺部に立地するのに対し、弥生時代になると平野の中央部に進出してくる。出雲市矢野町に所在する矢野遺跡がその好例だが、弥生時代中期になると、天神遺跡や下古志町に田畠遺跡、知井宮町に知井宮多聞院遺跡などの大集落遺跡が営まれている。就中、矢野遺跡と知井宮多聞院遺跡は貝塚を含み、遺跡地の前面に広がる入海（『出雲国風土記』所載の「神門水海」の原形）を想定させるとともに、当時の食生活の一端を窺い得る好資料を提供している。しかし、弥生時代といえば稲作の始まった時代ともいわれるよう、矢野遺跡から検出された稻穀压痕のついた土器底部がそれを立証している。弥生時代の遺跡は平野の中央部とはいえ、その殆んどは沖積平野の微高地である自然堤防に立地し、それは古墳時代以降も踏襲されている。

出雲平野において葬制がわかるものとしては、大社町所在の原山遺跡のほかに、弥生時代中期の壺棺墓が大神遺跡で確認されている。弥生時代末期になると大津町に四隅突出型墳墓7基（うち1基は消滅）を含む西谷墳墓群が営まれ、同型式の墳墓では安来市荒島地区とともに当該期の二大密集地となっている。

古墳時代中期になると平野の北部には大寺古墳が営まれているが、古墳時代後期には大念寺古墳をはじめ、築山古墳・地蔵山古墳・妙蓮寺山古墳・宝塚古墳などの横穴式石室墳が次々と築造され、有力豪族の台頭を如実に示している。このことは、その背景となる経済的基盤としての平野の開発が進展したことを示唆するものであろう。また、山腹には数多くの横穴が群をなしており、代表的なものとしては上塩治町の大井谷横穴群や知井宮町に所在する福知寺山横穴群がある。

奈良時代以降になると、丘陵部に石檻を用いる火葬墓が數ヵ所認められるに過ぎない。

古墳時代の集落遺跡の多くは実体の不明な遺物散布地として確認されている遺跡であり大念寺古墳をはじめとする大古墳が数多く存在しながらも、明確な住居跡が検出された例はない。しかし、奈良時代になると天神遺跡に掘立柱建物が検出されており、神門郡の郡家に比定する説もある。

平安時代については殆ど明らかでないのが実状だが、中世になると、大廻城をはじめとする山城が数多く築かれ、一部の山城では発掘調査も実施されている。上塩治町に所在する大井谷城跡は昭和53年の調査で、西1郭から建物跡・石列・柵が検出されている。また、上塩治町の出雲工業高校東側に所在する半分城跡の西1郭からは、土塁・土墻・柵が認められている。しかし、城跡の調査はその一部分が発掘の対象であり、全容は依然不明である。

### III 遺跡を構成する層序

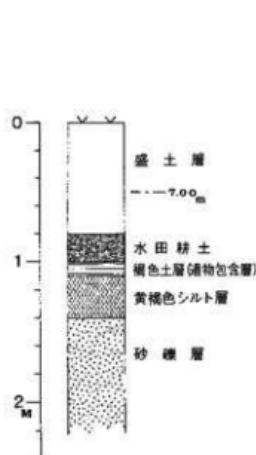


図4 遺跡の層序

#### 盛土層

現地表から80cmの深さまでは、水田埋立ての盛土となっている。上部は花崗岩のばいらん上の真砂を敷き、下部は拳大から人頭大の礫を多量に含んだ粘性の強い洪積土で地固めしている。

#### 水田耕土層

現地表から80cmの深さに上面があり、20cm程度の層厚をもつ。灰褐色を呈し、粘性はあるが、かなり脱水した状態にある。当時の稻株も多少残痕している。

遺物は、水田耕作の際に下部層である褐色土の攪乱掘り起こしによる混入及び水田耕作時の新しい時代のものを含んでいる。

#### 褐色土層

水田耕土の下部に10cm程度の厚さがある。周辺の畑地では、当該層が厚いところで1mにも達する。おそらく、本来畑地であったところを水田に作付転換したと思われ、その際に取水の関係などからかなり掘削したため現況を呈するようになったと思われる。

粘性は弱いがかなり緻密で締まった構相を示す。遺物包含層であるが、層が薄いため自ら小破片が多い。

#### 黄褐色シルト層

天神遺跡に限らず、沖積平野の自然堤防に広く分布している。自然堤防の基層である砂礫層の上部に堆積しており、当該地においては30cm程度の層厚をもつが、土壤Ⅰの地点では1mの厚さがあり、発掘調査区の中でも特異な様相を呈す。色調は黄褐色で堅緻ではあるが、含水すると少し軟化する。調査区の西側ではシルト層が砂質になり軟かく、色調も灰白化する。

遺物は全く含まず、遺跡での地山となっている。

#### 砂礫層

自然堤防の最下部を構成する層であり、かなりの層厚をもつ。直接発掘調査とは係わり

をもたないが、遺構の多くはその下底がシルト層を突き抜けて当該層に達している。そのため、上層を一度堆土すると崩れやすく、遺構の保存状態は必ずしも良好とはいえない。

\* 土壌の色調については、報告者の主観によっているのが実状である。たとえば、天神遺跡においても、本報告で褐色土層としたものについては、茶褐色土層（古代の山雲を考える）・暗褐色土層（天神遺跡、1977）と称呼されている。同一地点での上下層の識別ができれば別に問題がないとも思えるが、上記の例もあるので標準上色帳などを使って統一することが望ましい。

#### IV 調査に至るまでの経緯

昭和46年12月、海上地区土地区画整理事業に伴って発見された天神遺跡は、その後の分布調査によって相当広範囲に及ぶものであることが判明している。遺跡の中心部と推定される天神天満宮から北西に100mの至近にある建設省職員宿舎敷地は当該遺跡の範囲にあるが、昭和51年11月、1号棟新築の折、協議なくして基礎工事をおえていたため、2号棟新築の際には事前調査を行うという確約を得ていた。このたび2号棟建築が具体化したため、昭和56年4月27日、出雲市教育委員会に対し、発掘調査の要請が文書でなされ、それを受けた出雲市教育委員会は口頭で島根県教育委員会文化課に調査員の派遣を依頼した。しかし、明快な回答がないため、昭和56年9月16日に文書をもって派遣を申請したが、9月21日に職員の派遣が不可能な旨回答があった。

県教委からの職員派遣の道が閉ざされたため、専門調査員の確保についてその後検討がなされた末、市立出雲図書館の川上稔主事が発掘調査を担当することになり、10月14日に建設省出雲工事事務所において両者による発掘協議がなされた。10月16日に出雲市教育委員会から建設省出雲工事事務所宛、発掘調査についての文書回答を行なったのち、10月20日に契約を締結した。

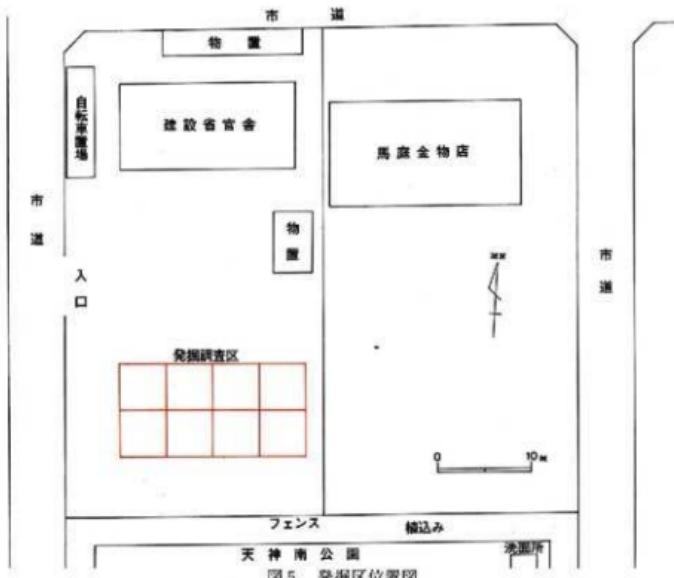


図5 発掘区位置図

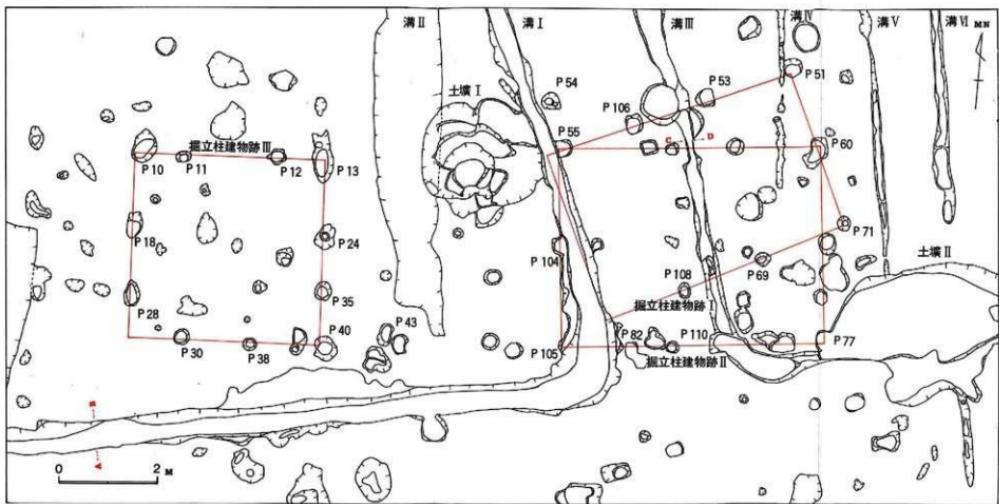


図6 遺構配図

## V 調査の経過

調査は、昭和56年10月21日から12月17日までの約50日間にわたって実施した。以下、調査の経過を日を追って概述する。



図版 2

10月21日(木) 晴れのち曇り

盛土部分を機械投入して12×22mの範囲を旧水田耕土の上面まで剝土掘削する。発掘調査の範囲は建設省職員宿舎よりも四周に少し広げ10×20mが対象になる。



図版 3

10月22日(金) 晴れのち小雨

機械掘削後の残土を取り除き、旧水田面での平坦化作業をする。午後からはグリッド(5×5m)を設定する。



図版 4

10月23日(土) 曇り一時雨

水田耕土層の剝土を開始する。須恵器・土師器の細片が混在して出土する。



図版 5

10月27日(水) 晴れ

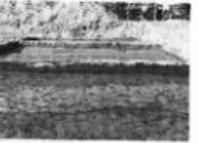
水田耕土の剝土を終え、褐色土層(遺物包含層)の発掘に着手する。



図版 6

11月10日(火) 曇りのち晴れ

褐色土層の発掘をほぼ終了したため、シルト層(遺跡での地山)上面でのプラン確認作業をIAグリッドから開始する。



図版 7

11月16日(月) 晴れ

プラン確認作業に続いて、セクションベルトの土層図を作成する

11月18日(木) 晴れ



図版8

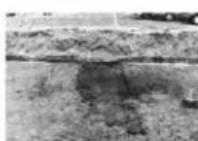
セクションベルトを除去し、平板測量（発掘区位置図）にはいる。



図版9

11月19日(金) 晴れ

調査区全体の精査をして遺構の検出につとめ、遺構の発掘を溝Iから開始する。弓原の旧国道沿いの水準点を基に標高を調べる。



図版10

11月21日(土) 晴れ

溝IIの発掘を完了する。溝Iからは古銭（元豊通宝）が出土する。検出した遺構の全てに番号を付与する。



図版11

11月24日(火) 曇り

20分の1 遺構実測図を作製するため、発掘区全域に1 mグリッドを設定する。溝Iの遺物は殆んどが中位より浅い位置から出土する。



図版12

11月25日(水) 曇り

溝Iの発掘をほぼ終え、溝脇の深い落ち込みなどを綺麗にする。



図版13

11月26日(木) 晴れ

ピットの発掘に着手し、P43・P54から遺物が出土する。



図版14

11月27日 曇り

溝III・溝IV・溝V・溝VIの発掘を開始する。溝Iと溝IIIの土層断面の実測と写真を撮る。



図版15

11月30日(月) 曇りのち雨

土壤Iの発掘に着手する。上面の50cm四方に壙が4個体埋まつて出土したため、写真と実測図をとる。



図版16

12月4日(金) 晴れのち雨

土壤Iから土器・鉄製品が出土。溝IIIの最東部の北側はシルト層を5cm程度貼付けており、土壤が重複していることが判明する。



図版17

12月5日(土) 曇りのち雨

ピットのレベル測定をする。溝IIIと土壤Iを完掘する。



図版18

12月8日(火) 曇り

造構発掘の全てを完了し、1m方眼に実測のための水糸を張る。掲立柱建物跡を検出する。

12月10日(木) 晴れ

造構実測図等を終える。



図版19

12月12日(土) 曇り

発掘調査区全面の清掃をしたのち、写真撮影を行う。午前中に発掘用具の片付け・搬出をする。

12月17日(木)

機械によって埋戻しを行い、すべての発掘日程を終える。

## VI 調査の概要

調査地は、出雲市塩治有原町6丁目62番地の建設省職員宿舎敷地内で、隣接した2号棟新築に伴う発掘調査である。現在の地目は畑で、周囲の畑地と同じ高さになってはいるが、本来は水田であり、土地造成の際に80cm程度の盛土を施している。発掘調査にあたってはそれを考慮して、旧水田面まで重機による掘削を計り、その下層を発掘調査の対象とした。

建設省職員宿舎の建物面積は126m<sup>2</sup>であるが、四隅を少し広げて10×20mを発掘対象面積とし、現地表面では12×22mを重機の掘削範囲とした。調査地には80cm程度の盛土があるため重機で掘削し、水田面の南北10m、東西20mにそれぞれ5mごとに杭を打ち、5×5mのグリッドを8区設定した。南北方向は北からA・Bを、東西方向には1～4を番号付与し、1Aグリッド（発掘区の北西隅）から発掘を開始した。

調査は、水田耕土層を除去したのち、褐色土層（遺物包含層）の発掘を行ない、その下層の黄褐色シルト層（地山）の上面で遺構の確認作業を行なった。シルト層は、西側ではやや砂質で灰白色であったが、全体的には黄褐色で表面には亀甲状斑を呈し、識別は容易であった。ただ、発掘区最東部ではシルト層がブロック状になっていて見極めにくいく所が小範囲あったが、その一部は5cm程度の厚さに貼付けたものであることがわかった。シルト層の厚さが、一般的に30cm以内であることから、遺構の下底はシルト層の下部層である砂礫層となっている場合が多かった。

遺構は、溝状遺構6（I～VI）、掘立柱建物3（I～III）、土壙2（I・II）と、他のビットが数多く検出できた。溝Iと溝IIIが対応する位置にあり、掘立柱建物は2×3間が2棟とそれ以外に1棟ある。土壙は、発掘区の中央部と最東部にそれぞれ存在する。

出土遺物は、土器・石製品・鉄製品で、土器の殆んどは破片が占める。石製品は1点で鉄製品は10数点を数える。遺物は褐色土層と遺構中から検出したが、水田耕土からも搅乱混入して少量が出土した。

調査は50日を超長期に亘ったが、雨模様の日が多く、快晴の日は殆んどなかった。それに加えて調査員が1人のため進歩が危ぶまれたが、地元の方々の協力によって予定より半月遅れでどうにか発掘作業を終了した。

## VII 遺構と遺物

### 溝 I

#### 遺構（図-7、図版20）

調査区の西半分を蔽うようにして掘さくされ、発掘によって確認した限りでは総延長は20m（東西方向12m、南北方向8m）に及ぶ。溝幅は上面が40~80cm、下底が20~50cmであるが、コーナー部分では多少広くなっている。溝の断面は片薬研状を呈し、深さは50cmで側壁の一方は垂直に立ち上り、もう一方はU字を半截した形狀になっている。側壁の下部と溝底は黄褐色シルト層の下層である砂疊層のため崩れやすい。

#### 遺物（図-8、図版22）

土師器（図8）底径5cmの坏で、回転糸切りによる切り離しをしている。体部は緩く立ち上り3cm残存しているが、その先を欠いている。

土製品（図版22-1） 淡褐色を呈する土製品で、土製支脚の一部か瓶の把手と思われる。基部（接合部）の断面はほぼ円形で3.5cm、先端までは4cmをはかる。

甕（図版22-2） 基部の幅5cm、先端まで5cmの三角断面の錐状を呈する破片である。本体から割離して8cmしか残存していないが、甕の底部と推定される。底部は体部に貼付けたもので、器表面を工具により調整している。

古銭（図版22-3） 私鋤銭の元豊通宝で、改造悪銭である。篆書・無背で、径2.4cmの中央に6mm方形の有孔をもつ。量目は2gで、溝の中位の深さから出土した。

鉄製品（図版22-4-5） (4)は長さ7cm、幅8mmの棒状鉄器で(5)は残存長4cmで、鍔と思われるが判然としない。



図版20 溝I（西から）

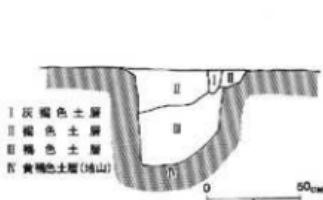


図7 溝Iセクション図



図版21 溝I（左側）と溝IV

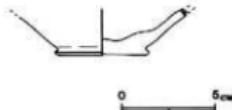
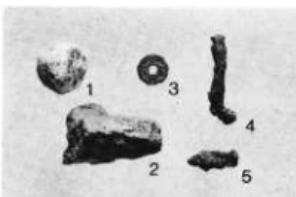
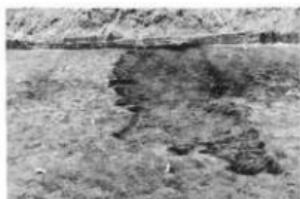


図8 溝I出土遺物(土器)



図版22 溝I出土遺物



図版 23 溝II(南から)

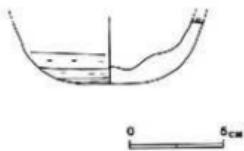


図9 溝II出土遺物

### 溝III

#### 遺構 (図版24・図10)

溝Iと対応する位置にあり、発掘調査によって知る限りでは、総延長は12m (南北方向7m、東西方向5m) である。溝幅は上面が20~40cmでコーナーが少し広くなっている。側壁はU字状を呈するところが多く、深さは15~30cmと浅い。

溝のセクションは、上層から I (褐色土層)、II (褐色土層)、III (褐色土層)、IV (黄褐色シルト層)となってしまっており、I は覆土の層である。

南北方向の溝の北寄りにある大形ピット (P52) と切り合い関係にあるが、そこでは溝幅40cm、深さ30cm



図版24 溝III(南から)

の方形断面がセクションに表出し、溝Ⅲがピットよりも新しい時期の遺構であることを示している。また、溝の東端部では、土壌Ⅱを切り、溝Ⅴ・Ⅵに切られるという複合関係を示している。

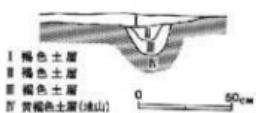


図10 溝田セクション図

溝の規模は溝Ⅰを小型化した程度で、両者は形態・方向性など相似している。

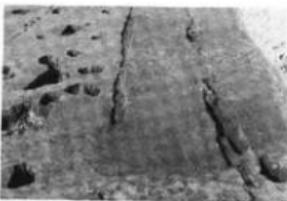
#### 遺物

土師器壊の糸切り底部の破片やその他器形不明の細片が出土する程度でしかない。

### 溝Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ

#### 遺構（図版25）

溝Ⅲに囲まれた内側に位置している。溝Ⅳは、幅10cm、長さ3.6m。溝Ⅴは、幅15cm、長さ6.8m。溝Ⅵは、幅20cm、長さ9.6m。3条の溝とも深さは5~10cmで浅く、Ⅳ溝とⅤ溝は1.8m、Ⅴ溝とⅥ溝は1.2m距ててほぼ平行に伸びている。Ⅴ溝とⅥ溝は土壌Ⅱと複合しているが、遺物・土層状態からみて土壌Ⅱよりも新しい時期の遺構である。



図版25 溝Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ(左から)

#### 遺物

近世の陶磁器片が溝Ⅵから出土したのみである。

### 掘立柱建物跡Ⅰ・Ⅱ

#### 遺構（図11、図版26）

調査区の東半分に、東西3間、南北2間の複合した2棟の掘立柱建物跡が検出され、長軸の方向は、ⅠがN $65^{\circ}$ E、ⅡがN $85^{\circ}$ Eとなっている。掘立柱建物跡Ⅰは、径30~40cm、深さ18~35cmのピットで構成され柱間1.6~1.8mをはかる。P106とP108の中間にピットが存在しないことと、溝Ⅰの西方に関連するピットが見当らないことから溝Ⅰの位置にピット列があったものと想定される。同Ⅱもほぼ同規模である。掘立柱建物跡Ⅰの西端ピット列は溝Ⅰを掘る際に壊され、またⅠ・Ⅱとも溝Ⅲを跨いで遺構が構築されている。



図版26 掘立柱建物跡Ⅰ・Ⅱ

Ⅰ・Ⅱとも、土師器の細片が少量出土した。



図11 掘立柱建物跡 I・II 造構実測図

### 掘立柱建物跡III

#### 造構 (図12、図版27)

溝Iに囲まれた内側に造構は存在する。南北、東西とも4本のピットで構成された3間×3間の建物跡であるが、南北のピット列が大ピット（径30～60cm、深さ7～24cm）であるのに対し、東西のピット列は両脇以外では小ピット（20～30cm、深さ9～17cm）を配置している。これは、上屋構造に左右されたものと解釈できるが詳しく述べは判らない。なお、南西隅のピットは調査では検出できなかった。

ピットの柱間は、南北が1.2～1.4mであるのに対して、東西は多少両端のピッ

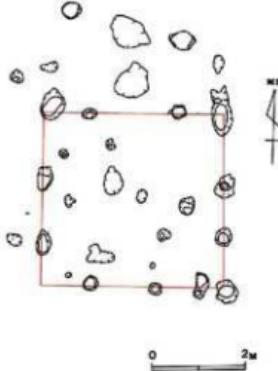


図12 掘立柱建物跡III 造構実測図

トに偏っていて一定ではない。各ピット中には根石は認められなかった。

#### 遺物

土師器の細片が少量認められたのに過ぎず、器形が見えるものは全くなかった。

#### 土壤 I

##### 遺構（図13、図版28）

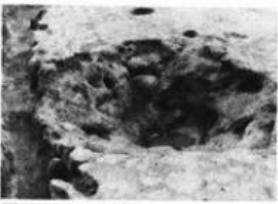
溝Iの西隣に掘られた円形の階段状遺構で、壇中に数段のテラスが認められる。土壤は径1.4mで、上面から緩く斜めにくだりテラスを設けながら径0.6mの壇底にいたる。湧水がひどく完掘はできなかつたが、0.9m以上の深さを有する。

##### 遺物（図14、図版29・30）

土師器 器高9.5cm、口径9cmの小形の甕（図14-1）は、球形に近い体部に丸味のある



図版27 扱立柱建物跡III(南から)



図版28 土壌I(北から)

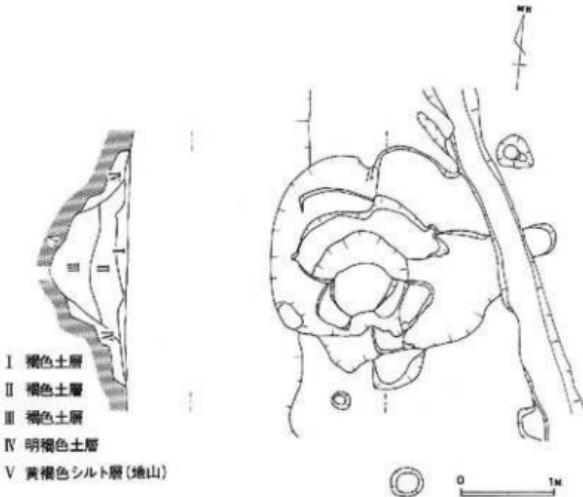


図13 土壌I 遺構実測図

底をもち、「く」の字状に口縁部が開く。ほぼ完形の土器で、頸部以下の外面に縱方向の細いハケ調整を施し、内面はケズリ成形をしている。器高6cm、口径15cm、底径6.5cmの壺(図14-2)は、体部外面にロクロ水挽き成形が強く窺われ、やや上げ底の底部には回転糸切り痕が残る。器形15.5cm(推定)、口径16.5cmの壺(図14-3)は、ほぼ球形の体部外面にハケ調整を加え、頸部を横ナデしている。

土製品(図版30-1) 接合部から先端まで6cm、径3cmの壺の把手である。

鉄製品(図版30-2) 幅2cm、長さ9cmの板状の鉄器だが、用途は不明である。



図版29 土壇I 遺物出土状況



図版30 土壇I 出土遺物

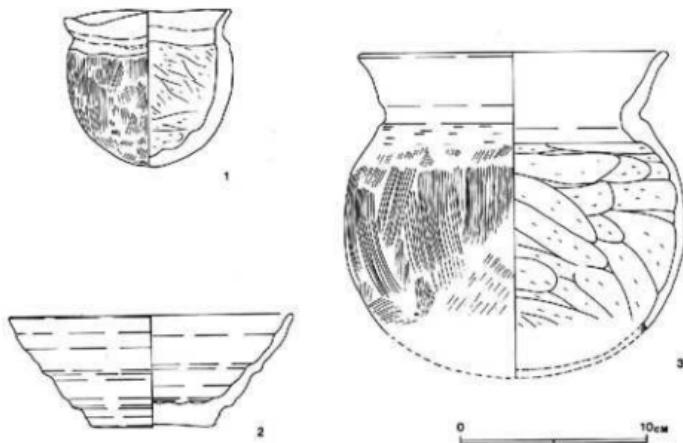


図14 土壇I 出土遺物実測図(土器)

## 土壤II

### 遺構 (図15、図版31)

調査区の東南隅に位置する東西3.5m、南北2.5mの不整形の土壤である。深さは0.7mで、境内には南に幅0.4~0.8m、長さ1.6m、西に幅0.6m~1m、長さ1.4mのテラスがある。発掘調査の段階では、土壤IIの北半分の上層には地山である黄褐色シルト層が広がっており、溝IIIの発掘の過程で黄褐色シルト層の下部にも褐色土層が広がっていたことがわかったものである。黄褐色シルト層は、10cmの厚さで約3m<sup>2</sup>にわたって溝IIIの北脇に貼付けられていた。

### 遺物 (図16、図版32)

土師器 (図16-1・3) 底径8cm、高さ1.5cmの高台のついた器種不明の土器 (図16-1) である。淡褐色を呈した胎土が良好でやや軟質である。底径6cm、器高4.5cm(推定) の壺 (図16-3) は、土壤I内出土の壺 (図14-2) と似ており、肥厚した底部に回転糸切り痕を残すほか、体部外面にはロクロ水挽き成形をしている。また、器表が磨滅しているためよくはわからないが、赤色塗彩の形跡がある。

### 備前焼 (図16-2) 淡



図版31 土壤II(南から)

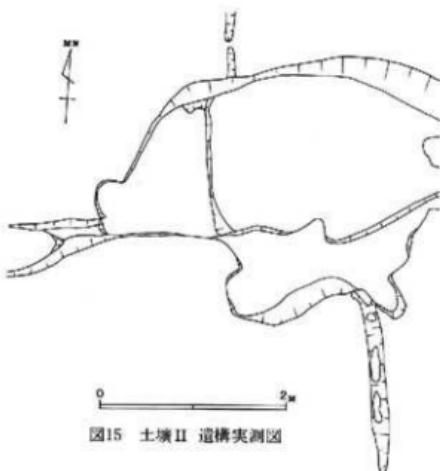


図15 土壤II 遺構実測図

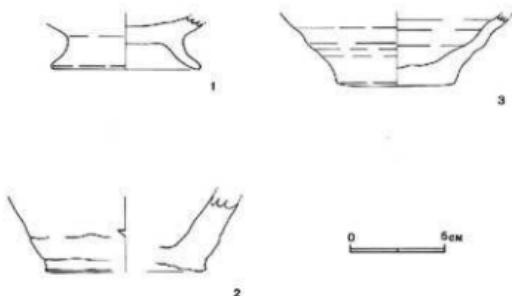


図16 土壤II 出土遺物(土器)

赤褐色を呈す底部の破片だが、器種は不明である。



図版32 土壌II出土遺物

土製品（図版32-1） 3～4cmの長円形断面をもつ土師質の甌か瓶の把手で、先端までの長さは6cmである。出土した把手のなかでは最大のものである。

鉄製品（図版32-2） 径0.7cm、長さ8.5cmの棒状の鉄製品だが、欠けていて用途は不明である。

#### その他の構・造物

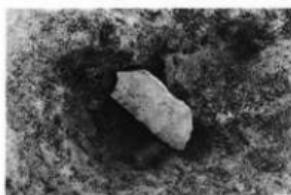
P 54

#### 遺構

調査区の中央北寄りにある径35cm、深さ16cmのピットで、溝Iに接した位置にある。

#### 遺物（図17、図版33）

須恵器（図17-1） 淡灰色の堅緻な壺蓋で、天井中央部に径4.5cmの環状の摘みをもつ。器高は2.5cm（推定）、幅は14cm（現存長）で端部を欠く。体部は僅かに内窵し、外面はケズリと横ナデ、内面は横ナデで調整している。



図版33 P 54 遺物出土状況

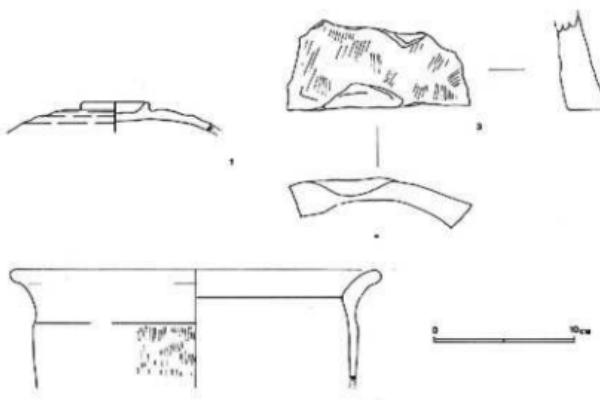


図17 P 54 出土遺物実測図

土師器（図17-2） 口径26cmの甕で、口縁部の破片である。口縁は短かく、端部は丸くすぼまる。体部外面の頸部に幅広い横ナデを施し、その下は縦方向の荒いハケで調整している。また、内面の口唇部の下には緩い稜がある。

土製品（図17-3） 土師質で、甕の底部と思われる。厚い器肉は2.5cmをはかり、幅14cm、高さ6cmの破片である。体部外面を縦方向の細いハケやナデで調整し、内面はケズリを施している。体部は緩く内弯し、復元底径は50cm程度と推定される。

#### P43

##### 遺構

調査区中央やや西寄りの溝Iと溝IIの中間に位置する。長径45cm、短径25cmの長円形を呈し、深さは20cmのピットである。

##### 遺物（図版34、図版35）

数多くのピットのうち、器種・器形が推定できる遺物を検出したピットは、P54とP43だけであった。

須恵器（図版35-2） 蓋環の端部の破片である。器肉は0.5cmで口唇部に受口をもち、胎土が良好で堅緻な土器である。

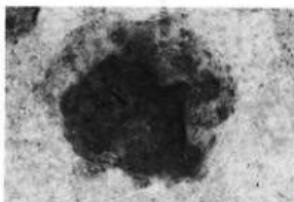
鉄製品（図版35-1） ピットの底部から出土した長さ5cm、折損部の幅2.5cmの刀子状鉄製品である。

##### 遺構に伴わない覆土中の遺物

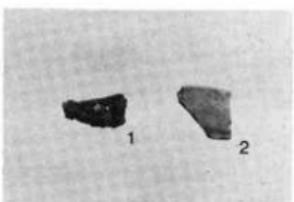
検出した遺物は褐色土層に含まれ、土師器・須恵器・陶磁器の径5cm未満の細片が殆んどであったが、土器類のほかには、砥石1丁、土師質の把手1点、鉄製品7点、鐵滓3点が出土した。

砥石（図版36-1）は、幅3.5cm、長さ7cm、厚さ3cmで、表裏の二面が使用され平滑になっている。鐵滓（図版36-2）は、出土した3点のうちの1点で、径5cm、50gのものである。把手（図版36-3）は、接合部において径5cmの円形断面で、先端までの長さ6cmの瓶の把手である。鉄製品は、7点のうちの1点で、棒状のものであるが用途は不明である。

覆土からの出土遺物のうち、鉄製品6点、鐵滓2点は、溝Iのすぐ脇から検出された。



図版34 P43出土状況



図版35 P43出土遺物



図版36 覆土中の遺物

## VIII 結語

### 遺構について

溝Ⅰと溝Ⅲは、規模は違ってはいるものの溝の走向が一致しており、同時存在の可能性が強い。偶然にもコーナーの部分が発見されたが、北と西にどの程度伸びているのかは知ることが出来ない。しかし、山口県の下右田遺跡では、一辺が約30mの方形に囲繞する鎌倉時代～室町時代の溝が数例検出され、そのなかには天神遺跡の溝Ⅰと溝Ⅲの位置関係に酷似した遺構もみられるので、今回の調査で明らかになった溝Ⅰと溝Ⅲがそれぞれ方形に囲繞する遺構である可能性は強い。そうだとすると、環濠にしては規模が小さすぎるのに屋敷地を画する溝状遺構であったと推定される。

溝Ⅱは、浅くて幅広い溝状遺構であるが中途で消失しており、遺物も殆んど認められなかったので、何の機能を果たしていたのか不明である。

溝Ⅳ・V・VIは、狭幅の細長い溝状遺構であるが、ほぼ平行に走っていることからみて、耕作の際に出来たものではなかろうか。

掘立柱建物跡Ⅰ・IIは、それぞれ東西3間、南北2間の規模を有し、掘立柱建物跡Ⅲは、東西3間、南北3間のものである。3棟とも側柱式の建物だが、I・IIとIIIでは多少上墨構造が異なるかも知れない。山田水呑遺跡では、検出された52棟の掘立柱建物跡を分析し、主にその床面積を基準として、住居・納屋・作業所・倉庫に類別しているが、それに準拠すると、内上間住居に該当するようである。

土壙Ⅰは、径1.4mの階段状遺構で、壇内にテラスを設けている。壇底は湧水がひどいため、確認できなかった。遺跡では30cm程度しかない黄褐色シルト層が、この土壙の付近だけに限って1mの厚さがあり、しかも土壙中央部は、もう少し深いという点から、場所を選んで意識的に掘り深めたようにも見受けられる。しかし、県内外において素掘りの井戸は少なく、大半が石組みであることから断定はできない。ただ、形態的な類例を求めるところ木県の薬師寺南遺跡では、一段の加工をした素掘りの井戸が検出されている。

土壙Ⅱは、溝Ⅲと複合した不整形の土壙であるが、遺物をあわせ検討してもその機能を推定できない。

### 遺物について

土師器は、ロクロ使用で回転糸切り底の坏が溝Ⅰ・溝Ⅲ・土壙Ⅰ・土壙Ⅱから出土しているが、土壙Ⅰを除けば小破片に過ぎない。また土壙Ⅰからは壺と小形罐が出土している。須恵器は、土師器にくらべると非常に少なく、僅かにP54の坏蓋が注目される程度である。

備前焼は、土壙IIから数片出土した。

近世陶器は、溝VIから出土したほか覆土に多少混入している。

土製品は、多くが瓶の把手であり、竈の底部破片が1点あったが<sup>(出4)</sup>、岡山県の宗金遺跡から類例が出<sup>(出5)</sup>土している。

鉄製品は十数点出土したが、用途不明のものが多い。

石製品は、半欠した砥石1丁である。

鉄滓は、僅か3点の出土をみただけである。

#### 遺構の時期について

溝Iと溝IIIが、溝の対応性などから同時期の遺構であろうことは既述の通りだが、両溝からの出土遺物は少なく、僅かに土師器の糸切り底をもつ環片と古錢がある。環は県内出土例からの時期決定は難しく回転糸切り技法が導入された平安時代以降の遺物という程度しかわからぬので扱りどころにはならない。しかし、溝の中ほどの深さから出土した私鑄銭の元豊通宝は、鎌倉時代末から室町時代にかけて使われているので<sup>(出6)</sup>、この時期の遺構である可能性が強い。

土壙Iは土師器が豊富に出土したが、明確な時代区分が確立していないため断定はできない。しかし、小形表は、滋賀県の柏原遺跡<sup>(出7)</sup>の住居址から出土した遺物に大きさ・器形が似ている。それには、9世紀前半の時期推定がなされているが、回転糸切り底の環の存在を考慮するとその頃か、又はそれをやや降った時期に比定できるように思える。さらに、溝Iによって土壙Iが切られている点もあわせ考えるとその蓋然性が強い。

土壙IIは、溝IIIに切られている点や、土壙Iとはほぼ同じ遺物を含むことからみて、土壙Iと同時期の遺構と推定される。

溝IIは、遺物では時期決定が難しいが、土壙Iを切っているため、それ以後の遺構と推定される。

溝IV・V・VIは、近世の陶器が出土しており当該期の遺構であろう。

掘立柱建物跡I・IIは、遺物が出土していないので難しいが、P54の環蓋が奈良時代の特徴である環状摘みを有する点や、P43に須恵器蓋環の破片が出土したことから多くのピットに当該期の可能性がある。またさらには、遺構が溝Iや溝IIIによって切られていることなどから推測すると、おそらく奈良時代の遺構ではないかと思われるが、断定をするまでには至らない。

掘立柱建物跡IIIは、他の遺構とは複合せず、遺物も出土していないので時期は推定できないが、位置からして溝Iに伴う可能性もある。

## まとめ

このように、調査区では、各時代の遺構が複合しているが、掘立柱建物跡Ⅲが溝Ⅰにかかりに伴うものであるとするならば、30m四方の畠敷地を周囲する溝状遺構のなかに建つ中世の農家の姿が浮び、また幅数mの道を距てた東側にもおそらく同種のものがあったことになり、極めて興味深い。

注1 『下右田遺跡』 日本道路公団（1978）

注2 『山山水呑遺跡』 日本道路公団（1977）

注3 『栗師寺南遺跡（本文編）』 栃木県教育委員会（1979）

注4 『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査13』 岡山県教育委員会（1978）

注5 小川 浩編 『日本の古鉄』 人物往来社（1966）

注6 『国道365号線バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I』

滋賀県教育委員会（1980）

## 参考資料 天神遺跡発掘調査のあゆみ

### 昭和47年の発掘調査（出雲市教育委員会）



図版37 新聞記事



図版38 報告書

昭和46年12月、土地区画整理事業が行なわれている出雲市海上地区において、土師器や須恵器などの遺物が多量に発見されたことが発端となり、県教委の試掘の結果、事前緊急調査をすることになった。

調査は、土地区画整理事業に伴う道路敷部分の調査で、試掘によって遺構が検出された6ヶ所に調査地区

を設定し、昭和47年1月12日から24日まで実施した。

第1～3調査地区からは、弥生時代中期後半ごろの遺物が出土したほか、当該期の春棺墓や溝状遺構などが検出され、集落跡の存在する可能性が強い。第4調査地区は、地元考古学研究者らによって簡単な調査がなされ、幅4・6mの古墳時代後期ごろの溝状遺構が認められ、溝の中から土師器の高环や碗が出土している。第5・第6調査地区では、今回の発掘調査において最も特筆すべき遺構が確認されている。奈良時代から中世にいたるまでの遺物と、複雑に重り合った溝や柱穴群などの遺構が検出され、掘立柱建物址I・II、柵、溝I・IIが確認されている。なお、第5調査区の南々東200mの地点からは墨書き器が耕作中に出土している。

### 昭和50年の発掘調査（出雲市教育委員会）



図版39 新聞記事



図版40 報告書

昭和47年の発掘調査によって、天神遺跡の範囲は東西450m、南北350m以上に及ぶ複合遺跡であることが判明した。今回の発掘は、出雲市に誘致した島根医科大学の開学に伴う学長・副学長・事務長の各官舎予定地のうち建物部分を対象としたものである。

調査は第1～3調査区を昭和50年

5月19日から7月11までの約2ヶ月間に亘り実施した。第1・第2調査区では多くの遺構・遺物が検出されたが、第3調査区には遺構が確認されず、若干の遺物が散見するに過ぎなかった。

第1調査区は高西公園の北西約100mに位置する。昭和47年の発掘調査で隣接する市道予定地から多量の弥生式土器が発見されている。調査によって検出された遺構は、弥生時代の土壙14、溝4、古墳時代の土壙3、溝1、奈良・平安時代以後の大形土壙3など各種時代にわたり複合している。第2調査区は天神天満宮の西方100mにある。昭和47年の調査の掘立柱建物跡が検出された南隣に位置し、今回の発掘においても掘立柱建物跡6棟が検出され、溝状遺構もかなり認められた。

#### 昭和53年の発掘調査（出雲考古学研究会）



図版41 新聞記事



図版42 報告書

民間の考古学研究グループである出雲考古学研究会によって昭和53年8月に実施された発掘調査である。

発掘地点は、天神天満宮の南西100mで、昭和50年の調査地区からも100m以上南方に位置し、天神遺跡の立地する自然堤防の縁辺部にあたる。

昭和50年の発掘調査では掘立柱建物

跡が6棟も検出され、その規模などから神門郡の都家の可能性も指摘されたが、今回の調査においても径80~100cm、深さ80~100cmの柱穴が2穴検出された。柱穴の柱間は約2mで方向がほぼ真北であることは、昭和50年の調査とほぼ一致するため、同時期の遺構の可能性がある。

また、柱穴の西側には土器窓がある。すべてが土師器で、その大半は同時期の一括遺物と考えられ、その中には、これまであまり知られていない古墳時代中期の完形の土師器が好資料を提供するものといえる。また、B-1区の耕作土層から出土した綠釉陶器は特筆に値する。窓の底部を残す10cmに満たない破片ではあるが、これまで島根県内では数例しかない貴重な遺物であり、天神遺跡のもつ官衛的色彩の強いことを窺わせる。なお、今回の発掘調査地点の西隣の畠地からは、昭和47年の発掘調査に関する報告書にも触れられている墨書き土器が出土しているが、鑑定の結果、「旱天」と読めることができた。

昭和57年3月15日 印刷

昭和57年3月25日 発行

建設省職員宿舎新築に伴う

**天神遺跡発掘調査報告書**

発行 出雲市教育委員会

印刷 株式会社 武永印刷